

青梅市文化財ニュース

第 2 0 5 号

平成 1 6 年 1 1 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859）

乗願寺のお十夜

お十夜は、陰暦 10 月 5 日の夜から 15 日の朝まで行なわれた十夜法要のことです。「南無阿彌陀仏」を 10 日 10 夜、一心に唱えれば、阿彌陀仏が現れて極楽往生ができると無量寿經に由来しています。

その始まりは、永享 2 年(1430)平貞経・貞国父子が京都の天台宗の真如堂で、承和 5 年(838)慈覚大師が唐より比叡山常行堂に伝えた引声念仏（註 1）により行なった 10 日 10 夜の法要とされています。その後、明応 4 年(1495)浄土宗の鎌倉光明寺の観普祐崇（かんよゆうすう）が後土御門天皇に招かれて阿彌陀經を講じ、あわせて引声念仏の法要を行ないました。それ以降、勅許により光明寺で十夜法要が行われるようになり、他の浄土宗系寺院でも十夜が行われるようになっていきました。

光明寺のお十夜で唱えられる引声念仏は双盤（そうばん）念仏であったため、関東では、多くの浄土宗系の寺院で、十夜に双盤念仏を唱えるようになりました。双盤念仏は、双盤という鉦（かね）を打ちながら太鼓と共に經文に節をつけて唱える念仏です。双盤鉦は、直径 30～50cm ほどの大きさで、木枠に吊り下げてあり、木の撞木（しゅもく）によって叩きます。双盤念仏は、引声念仏に芸能的な形態が加えられたもので、次第に民間に定着していき、俗に「鉦（かね）はり」と呼ばれるようになります。やがて、流派ができ、浄土宗系寺院だけでなく宗派をこえて行われるようになっていきました。

乗願寺は、勝沼 3 丁目にある時宗の寺院で、神奈川県相模原市当麻山無量光寺の末寺です。お十夜に奏される双盤念仏は、無量光寺を経て乗願寺に伝わったと考えられ、現存する 2 個の双盤鉦に文化 2 年(1805)10 月吉日の銘文があるので、江戸時代には既に行われていたと思われます。

江戸時代のお十夜については不明ですが、現在わかっているのは昭和初期のお十夜の様子です。この頃の十夜法要は、昼と夜行われ、そのうち夜は 7 時頃から深夜までありました。先祖、亡くなった家人や子どもの霊などを読經により供養する諷誦文回向（註 2）で、一人一人の霊を供養していたため午前 2 時ぐらいいまでかかり、その合間には何回も鉦はりが行われました。当時、乗願寺には双盤鉦 4 個と太鼓 1 個があり、地元はもとより西分や大柳から大門方面まで双盤講が組織され、十夜が近づくと毎日毎晩、鉦はりの稽古に寺に通いました。当日、各講中は、8 人から 10 人が一組になってやってきて、鉦が空くのを待って競って鉦は

りを披露しました。

境内や門前道には、串団子や饅頭、味噌おでんなどの屋台が並び、見世物小屋もかかりました。山門から石段の両側には、木枠に紙を貼った灯ろうに川柳や、へな振り(註3)が面白おかしく書かれていました。子どももこの日ばかりは夜遊びが許され、機屋の女工さんたちは「お十夜に行く」と言うとおおっぴらに休めたといい、スリに財布をすられたという話もあるほど大勢の人出で賑わったそうです。

この十夜に携わったのは、十夜世話人で、寺世話人や檀家の人たちや地元の住民でした。事前に、町内に和紙の袋を回し、米に限らず小豆、粟、稗、お金などを入れてもらい、十夜当日には仏前に供え、後で穀物の種類ごとに分けて売り、十夜の財源にしました。また、十夜と書かれたビラを檀家の戸口や商店の軒下に貼ってまわりました。当日は、諷誦文回向の受付、書き役、下足番、接待と大活躍で、後片付けは次の日までかかったといえます。参詣の人達の交通整理に、町内の青年団や青梅鉄道から派遣されたひとたちは、寺前の踏み切りの横断に気を配り、終電が通り過ぎるまで安全を見守りました。

寺と住民が一体となり年間最大の縁日として賑わったお十夜でしたが、戦争の激化にともない双盤鉦2個を供出する事態になり、下火になってしまいました。戦後は、規模も縮小し双盤講もなくなって鉦はりの無いお十夜になっていましたが、十数年前から、相模原の無量光寺の双盤講に楽器持参で来てもらうようになり、双盤念仏が復活しました。現在、乗願寺のお十夜は11月23日に行われていて、午後1時ごろ、双盤念仏(鉦はり)が始まります。高さ1mほどの台の上に5人が正座して、太鼓、1番鉦、2番鉦、3番鉦、4番鉦を叩きながら、抑揚や速さ、調子で変化をつけて一時間ほど経文を唱えます。ほどなく4、5人の僧侶による十夜法要が始まり、諷誦文回向などが行われます。その後、双盤の人達による双盤念仏と僧侶による念仏が唱えられ、導師の法話で午後3時頃には法要は終わり、参会者には回向を頼んだ戒名の札とお供物が配られています。

この文化財ニュースを書くのにあたり、お十夜について、乗願寺の飯田覚純ご住職には、たいへん詳しく教えていただきました。その話ぶりの中に地元の人たちによる鉦はりの復活を願っておいでのご様子が強くうかがわれました。

(文責 三好 ゆき江)

参考文献

- 『東京都双盤念仏調査報告』 東京都教育庁社会教育部文化課 1990年
『青梅勝沼ものがたり』 松崎 夏雪著 図書出版クレイン 2001年

註1 引声念仏(いんぜいねんぶつ) ...ゆるやかな曲調をつけて阿弥陀仏の名を唱えること

註2 諷誦文回向(ふじゅもんえこう) ...諷誦文とは、亡者追善のために施物を供え、僧に誦経を請う文。法会に際して導師が読む。回向とは、功德をめぐらして衆生の極楽往生に資すること。

註3 へな振り(へなぶり) ... (「ひなぶり(夷曲)」をもじっている) 狂歌の一、流行語で新趣味を詠じたもの。